

都道府県 番号 42	学校名 長崎県立佐世保中央高等学校	課程 定時制	学科 普通科	指定期間 26~28
---------------	----------------------	-----------	-----------	---------------

平成 26 年度 個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

高等学校に在籍する障害のある生徒の「意思疎通や学校生活・社会に適応する力の育成」を目指す自立活動等を取り入れた特別な教育課程の編成および特別支援学校等と連携した学校設定科目の学習内容・指導方法等の研究

2 研究の概要

対象となる障害のある生徒については、意思疎通や学校・社会に適応する力に困難を示すことから、コミュニケーションの基盤となる「読み・書きの学び直し」や「語彙の拡大」「様々な事象の整理」などの学習を自立活動及び各教科・科目の補充指導に相当する指導（以下「自立活動等の指導」）の領域「言語理解・場面認識」として取り入れた。今年度は、コミュニケーション能力、社会性や生活管理能力を身に付けさせることを目標に行った。活動として、前半をインターンシップに向けた準備として「自己理解」「職業理解」を中心に組み立て、後半は進路実現に向けた準備として「場面認識」「ソーシャルライフ・スキル・スタディ」を中心に組み立て取り組んだ。

次年度は、上記の生徒に加えて、コミュニケーション能力や判断力に課題を抱えている広汎性発達障害の生徒に対して、社会性の向上やソーシャルスキルトレーニング（SST）を中心とした自立活動の指導内容・方法についても研究をしていく。

また、すべての生徒にわかりやすい一斉授業の在り方とあわせて、一斉授業の中で障害のある生徒への個別の支援方法についても研究していく。

3 研究目的と仮説等

（1）研究開始時の状況と研究の目的

研究開始時の状況	本校では、今年、長崎県「高等学校発達障害等生徒支援推進事業」に係る指定研究「校内における特別支援教育体制の取組」の最終年度であった。当研究により、ユニバーサルデザインを意識した教育環境の整備が推進されてきた。 例) わかりやすい授業、学びやすい環境づくり、進路実現を目指した教育支援、キャリアを意識したコミュニケーションプログラムの開発、個別の教育支援計画等の推進、専門機関連携システムの構築など
研究目的	○生徒の特性にあわせた「自立活動」を推進していく。 ○教育課程の特例として「自立活動」を導入することにより、「合理的配慮」を実践化し、「インクルーシブ教育」の充実につなげる。 ○すべての生徒にわかりやすい一斉授業の在り方とあわせて、一斉授業の中で障害のある生徒への個別の支援方法についても研究していく。

(2) 研究仮説

障害のある生徒にとって、自立活動（新設領域「言語理解・場面認識（※）」）の導入は、「コミュニケーションに関する知識やスキル」「コミュニケーションにおいて相手の立場に立つという体験」を補うことにつながると予想される。

※H27は領域自立活動「SWP（Self-Help Work Program）」と名称を変更。

主題	研究項目	研究仮説	研究開発の内容	実施による効果
1) 教育課程の特例を設けて行なった指導	領域自立活動に準拠した新設領域「言語理解・場面認識」	左記領域の導入により、「コミュニケーションに関する知識やスキルアップ」「相手の立場に立つ体験」により、苦手なことが段階的にできるようになる。	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒一人ひとりの特性に合わせた指導内容・指導時間・指導方法等を研究していく。 1) 言語理解 2) 場面認識 3) ソーシャルライフ・スキル・スタディ 4) 自己理解と職業適性の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ●今年度は対象生徒1名に実施した。生徒は自分のよい面、よくない面について、理解できるようになった。 ●次年度の対象生徒の決定、本人・保護者への説明手順等について研究した。
2) 個々の能力・才能を伸ばす指導	「学びなおし」および総合的な学習の時間における「CSE（*）」の拡充等	「学びなおしに関する学校設定科目」および「コミュニケーション育成のためのプログラム」により、学習方法の改善、人間関係の構築をめざす。	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒の特性に応じた学習方法の指導を行い、学習内容の定着につなげる。 ●「コミュニケーション育成に向けたプログラム（CSE）」を充実させる。 1) 認知 2) 行動 3) 情動 4) ケース 	<ul style="list-style-type: none"> ●一人ひとりの特性に応じた学習方法等の指導を行っている。 ●「わかる」「できる」を体感し、学習に意欲的に取り組む生徒が多くなった。 ●インターンシップを目標にしたCSEでは、実習先での評価も高く効果的な内容であった。
3) 自立活動につながる環境整備	「個別の教育支援計画」および「単位認定基準」の作成等	生徒の特性に応じた「個別の教育支援計画」の推進等により自立活動の積極的実施につなげる。	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒把握のための方策について研究する。 1) 各種チェック 2) 個別の教育支援計画等 ●評価方法を含めた単位認定に係る規定を整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒の特性に応じた指導内容につなげるため、各種チェックリスト等を活用したより実践的な「個別の教育支援計画」を作成・活用することができた。

*CSE（コミュニケーション・スキルアップ・エクササイズ）

(3) 教育課程の特例

高等学校学習指導要領の必履修科目、総合的な学習の時間、特別活動（ホームルーム活動）に加え、特別支援学校に設定されている領域である自立活動を加えて編成している。

- ・自立活動の指導については、選択科目の一つとして扱う。
- ・個々の生徒については、年間1単位（35単位時間）～2単位（70単位時間）を想定している。
- ・自立活動は自校での通級を想定している。

「障害に応じた特別の指導」として設けた領域「言語理解・場面認識」の内容は以下のとおりとする。

1) 全体

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数 単位数等
自立活動等の指導に相当する「言語理解・場面認識」	<p>●指導内容</p> <p>将来の自立や社会参加に必要な資質の育成を目指し、生徒の特性に応じ、漢字や文章のしくみを学びなおすなどの手法も取り入れながら、コミュニケーション場面における「シチュエーションの理解」やコミュニケーションにおける「受・発信スキルの向上」を図る学習を少人数で行う。</p>	年 70 時間 週 2 単位

2) 各活動

① 言語理解

指導特性	自立活動と国語の教科補充指導
授業時数	<p>●計画 約 30 時間</p> <p>○実施 本年度は生徒特性・能力に応じ実施していない。</p>
活動目標	「かたち・文字等の認知」やコミュニケーションにおける「発信スキル」の向上を図り、能動的に学習や社会参加ができるための技術・態度の獲得を目指す。
活動主題	<p>○コミュニケーションに必要な「基礎言語」の学びなおし</p> <p>○学習メソッドの履修・実践による「確実で継続的な学びや業務遂行能力」の習得</p> <p>○「誠実な取り組み姿勢・態度」の獲得</p>
実施内容	今年度対象生徒の「特性・能力（漢字検定の結果等）」を鑑み、実施していない。

※①～④の関係性

(イメージ図)



② 場面認識

指導特性	自立活動と国語の教科補充指導を合わせた指導
授業時数	<p>●計画 約 20 時間</p> <p>○実施 16 時間</p>
活動目標	「認知や客観視するメソッド」の獲得や「コミュニケーションにおける受発信スキル」の向上を図り、能動的に「物事・仕事に協働して取り組むこと」や「相手の立場に立って話したり行動したりすること」ができるための技術・態度の獲得を目指す。
活動主題	<p>○「行動や事物を整理しその原因を測る」活動</p> <p>○「登場人物の行動や心理を推し量る」活動</p> <p>○「特定の事象が生じた理由を考える」活動</p>
実施内容	<p>1) 新聞記事における事実の考察</p> <p>①新聞記事の情報を本人なりに理解・整理する。 (1 時間)</p> <p>②新聞記事を指導者・補助員・本人 3 人で考え、三者の考え方の相違を整理する。 (1 時間)</p>

	<p>③記事の視点や認識プロセスを図式化し、他の事例との類似や相関について理解を広げる。（1時間）</p> <p>④考え方を整理し、それぞれの考え方の良さがあるということを認める。（1時間）</p> <p>2) 対人関係スキルの考察</p> <p>①インターンシップにおける対人関係について（3時間）</p> <p>②インターンシップ実習（学年主導でのインターンシップ体験以外に3時間）</p> <p>③パーソナルスペースについて（3時間）</p> <p>④サークル活動を想定した関係性について（3時間）</p>
使用教材	○新聞記事

③ ソーシャルライフ・スキル・スタディ

指導特性	主に自立活動の指導に相当
授業時数	●計画 約20時間 ○実施 11時間
活動目標	具体的な場面設定を行い、「自己プランニングや自己マネージメントのメソッド」などの習得を図り、学習や生活・社会参加（インターンシップ）に必要な「他者と協働できる力」「ソーシャルライフ・スキル」を身につける。
活動主題	○「自分の身の回りのあらゆる生活事項を項目立てる」活動 ○「時間・提出物等の管理・計画・分担等の計画」活動 ○「インターンシップ等における協働方法の検討」活動
実施内容	①インターンシップ時における業務について（3時間） ②アルバイトの意義・条件、断り方等について（3時間） ③一人暮らしで必要なスキル（5時間）
題材	○インターンシップ、修学旅行

④ 自己理解と職業適性の理解

指導特性	主に自立活動の指導に相当
授業時数	●計画 約10時間 ○実施 6時間
活動目標	職業に関する活動により、「自己理解や自己発見・自己開発メソッド」の獲得を図る。 「職業選択への意欲」や「仕事への主体性」を育むとともに「協働に必要な報告・連絡・相談」の技能や態度を身につける。
活動主題	○「自己理解に関する」活動 ○「職業（他者や事物）理解に関する」活動 ○「適正（自己と他者）理解に関する」活動
実施内容	① 職業に関する本人の希望の把握（1時間） ② 自分を知る（3時間） ③ 職業を知る（2時間）
題材	○インターンシップ、進路指導、キャリア教育

※「実施時数」のうち2時間は「総括（振り返り）の時間」とした。

※「教材」は自主教材で実施した。

(4) 個々の能力・才能を伸ばす指導（現行指導要領における一斉指導の改善工夫等）

1) 「学びなおし」の科目設定

「学習障害」や中学校時に不登校等で「学習空白」のある生徒たちを対象に、以下のプログラムを導入した。

①指導内容

実施学年	教科	科目名	単位数	実施方法
1年次	国語	現代文A基礎	1単位	○毎時間25分×2科目で実施、 ○各科目25分×2回=1単位時間 ○選択科目として履修（国数で2単位）
	数学	ベーシック数学	1単位	

② 内容の検証

生徒の現状	○レディネストestや考查結果、生徒の感想や反応等から適切である。
学年との関係	○平成26年度に1年次で設置（国語、数学） ○学年進行に伴い、平成27年度は2年次にも増設（英語、数学） 1年次で国語・数学、2年次で英語・数学を設置することとした。 2年次から希望する生徒もあり、複数学年に設定することは必要である。 ○選択科目として実施しており、履修は希望制としている。
他教科や自立活動等の指導との関連	○「国語」「数学」のほかの科目的基礎・基本を学んでおり、高校での学習内容の理解に繋がっている。 ○「自立活動等の指導」との関連性については、今後検証していく。 ○平成27年度から導入予定の「学習スキルアッププログラム」との関連性についても検証していきたい。
教材の整合性等	○中学校段階の学習内容を繰り返し行うことで、学習内容の定着を図ることができるような教材作成を行っている。 ○レディネストestを行い、生徒の学習到達度を確認したうえで、指導計画を作成しており、25分で学ぶことができる教材の質、量となっており、生徒の能力・特性と適合している。

2) 「総合的な学習の時間」における「CSE（コミュニケーション・スキルアップのためのエクササイズ）」

「コミュニケーション能力の育成」や「就職後の会話力」の育成などを目指し、個々の能力や才能を伸ばす指導の一環として、総合的な学習の時間において「CSE」を実施している。

① 実施内容

実施時間	運用学年	主な内容	実施計画		
			単元	年次	総計
総合的な学習の時間	1年次	「自己認知」に関するもの	2時間	19時間	31時間
		「相関認知」に関するもの	6時間		
		「行動」に関するもの	8時間		
		「情動」に関するもの	3時間		
	2年次	「インターーンシップ」に関するもの	5時間	12時間	
		「行動」に関するもの	5時間		
		「総合」	2時間		

② 内容の検証

生徒実態との関係	<ul style="list-style-type: none"> ○発達障害のある生徒、その傾向がある生徒に関わらず、一斉授業で行っているが、生徒アンケート結果・KJQテスト（*）の結果から、指導方法・指導内容は、おおむね適当である。 ○コミュニケーションが苦手な生徒には、担任とペアになって練習するなどの配慮をしている。
学年との関係	<ul style="list-style-type: none"> ○3学年を通じた指導計画が設定されており、おおむね適当である。 ○平成27年度からは、高等学校の学習に早期対応できるよう、1年次にLHRの時間も活用して「学習スキルアッププログラム」を導入する予定である。
他教科や自立活動等の指導との関連	<ul style="list-style-type: none"> ○「自立活動等の指導」と「CSE」の両者の関連性については、今後検証していく。
教材の整合性等	<ul style="list-style-type: none"> ○本校生徒の実態に応じて、題材、場面設定をしており、教材は概ね適当である。 ○1時間ごとの指導案、テキストを作成して実施しており、教材の量、使いやすさは、概ね適当である。 ○教材運用については、「情動」「行動」等の単元ごとに今後検証が必要である。 ○教材内容は同じでも、クラスごとに指導スタイルが異なるため、事前の打ち合わせが重要である。

* KJQ (早稲田大学 菅野純教授 心のエネルギーや社会性の状態を把握するテスト)

（5）研究成果の評価方法

1) 職員による評価・アンケート

- ア 教育課程の編成について
- イ 「言語理解（漢字・語彙の学びなおし）」の指導内容・指導方法について
- ウ 「場面認識」の指導内容・指導方法について
- エ 「ソーシャルライフ・スキル・スタディ」の指導内容・指導方法について
- オ 「自己理解と職業適性の理解」の指導内容・指導方法について

2) 対象生徒アンケート

- ア 該当科目に関する総括アンケート
- イ 「言語理解（漢字・語彙の学びなおし）」を学んで得たこと等
- ウ 「場面認識」を学んで得たこと等
- エ 「ソーシャルライフ・スキル・スタディ」を学んで得たこと等
- オ 「自己理解と職業適性」を学んで得たこと等

3) 保護者評価・アンケート

- ア 該当科目に関する総括アンケート
- イ 「言語理解（漢字・語彙の学びなおし）」を学んで得たこと等
- ウ 「場面認識」を学んで得たこと等
- エ 「ソーシャルライフ・スキル・スタディ」を学んで得たこと等
- オ 「自己理解と職業適性」を学んで得たこと等

4 研究の経過等

(1) 教育課程の内容等

年次	教育課程の内容等	
1年次	全体構成	「必履修科目」中心
	選択科目	中学校の学習内容を学びなおすための学校設定科目「ベーシック国語」「ベーシック数学α」を設定している。
	その他	総合的な学習の時間およびLHRにおいて「CSE」を実施する。
2年次	全体構成	「必履修科目」と「選択科目」の両方
	特例	○障害のある生徒の特性に応じた自立活動等の指導を実施する。 ○活動の前半はインターンシップに向けた準備として「自己理解」「職業理解」を中心に、活動の後半は進路実現に向けた準備として「場面認識」「ソーシャルライフ・スキル・スタディ」を中心に、内容を組み立てて、取り組む。
	その他	総合的な学習の時間およびLHRにおいて「CSE」を実施する。
3年次	全体構成	「選択科目」中心
	特例	平成26年度は運用なし（次年度は学年進行により運用予定）

(2) 全課程の修了認定の要件

これらの単位は、本校の全課程の修了を認定する要件として修得しなければならない単位数に含めることができることとする。

(3) 研究の経過

	実施内容等
第一年次 (平成26年度)	1) 自立活動等の指導に向けた準備・実施 (「言語理解・場面認識」として実施) 教育課程上の位置づけ、指導内容・指導方法の検討、教材開発等 2) 生徒の「実態把握」→対象生徒の「決定方法」の検討 3) 対象生徒の保護者の理解・受容に向けた面談等の実施 4) 平成26年度導入の「学びなおし」科目の指導内容・指導方法の研究 5) 平成25年度導入の「CSE」の指導内容・指導方法の検証、改善 6) 平成27年度導入の「学習スキルアッププログラム」の指導内容・指導方法の研究
第二年次 (平成27年度)	1) 自立活動等の指導「SWP」の実施・検証 指導内容・指導方法の検討、教材開発 等 2) 生徒、保護者、職員対象のアンケート →分析、改善 3) 評価方法の整備 4) 「学びなおし」科目の指導内容・指導方法の検証、改善 5) 「CSE」の指導内容・指導方法の検証、改善 6) 「学習スキルアッププログラム」の指導内容・指導方法の検証、改善
第三年次 (平成28年度)	第二年次の研究継続、まとめ（学習内容、実施学年等を含む） 1) 自立活動等の指導「SWP」の実施・検証・改善 指導内容・指導方法、教材開発 等 2) 生徒、保護者、職員対象のアンケート →分析、改善

	<p>3) 進路決定時の支援方法について（進路先との連携）</p> <p>4) 「学びなおし」科目的指導内容・指導方法の検証、改善</p> <p>5) 「CSE」の指導内容・指導方法の検証、改善</p> <p>6) 「学習スキルアッププログラム」の指導内容・指導方法の検証、改善</p> <p>7) 研究成果のまとめ</p>
--	--

（4）評価に関する取組

	評価方法等
第一年次 (平成 26 年度)	<p>1) 自立活動等の指導の設定に向けて (「言語理解・場面認識」として準備・実施)</p> <p>ア 生徒の実態把握等を行い、指導内容・指導方法を検討する。</p> <p>イ 教育課程上の位置づけも含めて、生徒に身に付けさせたいこと等について、職員にアンケート等を実施し、学習内容を精選する。</p> <p>2) 平成 26 年度導入の「学びなおし」科目的指導内容・指導方法の検証・改善</p> <p>ア 定期考查、小テスト、課題提出等による、学習内容の定着度について分析し、指導内容や指導方法等について検証する。</p> <p>イ 生徒・教員アンケートにより、指導方法等について検証する。</p> <p>3) 平成 25 年度導入の「CSE」の指導内容・指導方法の検証</p> <p>ア KJQ テストにより、社会生活の技術の定着度を分析する。</p> <p>イ 生徒・職員アンケートにより、指導内容等について分析し、改善する。</p>
第二年次 (平成 27 年度)	<p>1) 自立活動等の指導「SWP」の実施後の検証</p> <p>生徒、保護者、職員対象のアンケート実施 → 分析、改善</p> <p>ア 職員アンケート（項目・記述）・・前期末（9月）、後期末（2月）</p> <p>イ 対象生徒アンケート</p> <p>7月（第1回考查期）・・・自己評価等</p> <p>9月（第2回考查期）・・・自己評価等</p> <p>11月（第3回考查期）・・・自己評価等</p> <p>2月（第4回考查期）・・・自己評価等</p> <p>ウ 保護者アンケート</p> <p>前期保護者面談時（7月）、後期末（2月）</p> <p>2) 「学びなおし」科目的指導内容・指導方法の検証、改善</p> <p>3) 「CSE」の指導内容・指導方法の検証、改善</p> <p>4) 「学習スキルアッププログラム」の指導内容・指導方法の検証</p>
第三年次 (平成 28 年度)	<p>1) 自立活動等の指導「SWP」の実施・検証・改善</p> <p>（指導内容・指導方法、教材開発 等）</p> <p>2) 生徒、保護者、職員対象の各種アンケート実施 → 分析、改善</p> <p>3) 進路決定時の支援方法について検証（保護者、進路先との面談等による）</p> <p>4) 「学びなおし」科目的指導内容・指導方法の検証、改善</p> <p>5) 「CSE」の指導内容・指導方法の検証、改善</p> <p>6) 「学習スキルアッププログラム」の指導内容・指導方法の検証</p>

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

1) 対象生徒への効果

●知識・技能面	○ソーシャル・スキル等の知識が増えており、学習中・学習後、多くの場面で笑顔等がみられ、生徒の反応としては良好である。 ○インターンシップにおいて、配慮事項の引き継ぎなどもでき、細かな対応ができるようになったこともあり、職場からも高い評価を受けた。
●思考力・判断力・表現力、学ぶ意欲などを含めた学力	○進路希望が明確になり、学習意欲につながっている。 ○判断力・表現力を含めた学力との関連性について、効果を検証することは難しい。
●豊かな人間性	○まじめで誠実な性格であり、指示されたことは責任をもって最後まで行う。 ○円滑な友人関係を築くのは得意ではないが、人と関わっていきたいという前向きな気持ちが強くなっている。 ○様々な場面における対応等により知識の幅が広がっている。
●たくましく生きるという観点	○進学希望である。「自立活動等の指導」の中で、進学後の生活スキルなどを学び、「たくましさ＝社会上の対応力」は広がった。
●人間関係	○インターンシップにおける対応、仲間内での対応など、笑顔で対応する場面が多くなっており、中学校時代にみせたパニックは少なくなっている。 ○バスケットボールで、複数の生徒からパスの要求がくると、「次のパス出し」に戸惑い、立ち尽くす場面がある。日常的に次々と次の要求が来るような場面は少ないので、体育の授業以外では大きなトラブルは見られなくなった。
●学校・学習への意欲	○欠席はほとんどないが、「自立活動等の指導」の時間は特に意欲が見られる。
●生徒の学習上の負担	○今年度は、各教科の授業の一部に替えて、「自立活動等の指導」を受けたため、履修できなかった学習内容を自分で確認する必要があり、負担があったものと思われる。

2) 教員への効果

○平成24～26年度の県研究指定において「校内における特別支援教育体制の取組」と題した研究を進めてきており、「わかりやすい授業」や「学びやすい環境づくり」等ユニバーサルデザインに関する取り組みや特別支援を視野に入れた「指導方法の研究」等、「個々の能力・才能を伸ばす指導」につながる体制づくりを推進している。

○本研究においては、「自立活動等に関する研修会」「中学校の通級教室視察」等に全職員で取り組んでおり、「自立活動等の指導」の有用性に対する意識も少しづつ高まっている。

3) 保護者等への効果

○対象生徒の保護者とは、本研究の「自立活動等の指導」に取り組む際にも面談しており、保護者の希望等について、できること、できないことを整理して、指導計画にもある程度反映させることができ、満足度は高い。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

1) 対象生徒の絞込み

今後、対象生徒の決定については、以下のようなことが課題となってくる。

①	対象生徒をどう選定するか。
②	「自立活動」を企画・運営できる教員を確保できるか。
③	「自立活動」補助を担当する教員をどう確保するか
④	「自立活動」にかかるシステム運用の主担当をどうするか。
⑤	「自立活動」の履修における保護者の受容・理解をどうすすめるか。
⑥	教科指導、総合的な学習の時間、「自立活動等の指導」で実施している内容の相互関係性の検証やカリキュラムの編成をどう検討していくか。

2) 評価について

- 「自立活動」の振り返りとして、アンケートを実施した。生徒・保護者から高い評価を得ており、このことを研究の基点とし、今後とも研究を推進していく。
- 自立活動等担当教員は「評価A（優）」が多く、それ以外の職員の評価はより慎重（「評価B（良）」が多い）であるなど、指導者側の評価に差が見られる。
- 自立活動等担当教員の「生徒の長所を積極的に活かす視点」と、担任や保護者が「期待する支援ニーズ」や「現実的な進路希望への視点」との間に、指導のずれが生じる懸念もある。今後は自立活動等担当教員とそれ以外の指導に当たる教員との事前打ち合わせ、評価基準などに関するすり合わせが重要である。

自立活動等担当教員

- ・評価A（優）多い
- ・特別支援学校での経験
- ・生徒の対応力、長所を活かす発想

それ以外の職員

- ・評価B（良）多い。
- ・高等学校での経験
- ・現実的な進路保障、困難を克服する発想

3) キャリア教育の視点

「キャリアに関する指導」の基盤となる「自立活動」に関する研修が必要である。

長所を活かす視点

- ・長所を活かす進路保障
- ・生徒の良いところを尊重
- ・大学進学や積極的な進路保障

校内

現実的な進路保障 を目指す視点

- ・苦手な部分に対応する
- ・障害等に理解のある職場を推奨
- ・積極的な進路を進めるべきかの不安

出口

「自立活動」と「適性指導」の
整合性に関する研修が必要